



発行所/青山同窓会  
〒951 新潟市関屋下川原町2-635  
新潟県立新潟高等学校内  
TEL.025-266-2131  
編集、発行人/上村光司  
印刷所/オリオン印刷機  
〒950 新潟市南出来島1-19-1  
TEL.025-283-2151  
FAX.025-283-3804

# ごあいさつ

青山同窓会会長 37回 鈴木正二



会員の皆様には、お元気で新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年は、景気の動向も上向いて、活況を呈した業界も多かったと聞いております。同窓各位も各方面でそれぞれ活躍された事を大変喜ばしく思います。今年も一層のご活躍を期待しております。

そして会員相互の親睦を増し、母校の発展を図るという同窓会の目的達成に向けて、又、来たる一九九二年の母校創立百周年に向けて、同窓各位のより多くの参加と、ご支援・ご協力をお願い申し上げます。

会員の声を反映させながら、企画・実行されます各期幹事の

上げ、ご挨拶いたします。



昭和63年度青山同窓会  
七月二十日水開催

昭和63年度総会は、4月に真に一堂での会合となった。各新装のホテル新潟大宴会場で盛大に挙行。昨年までは、オムクラホテルで、ロビーや別室を使つての総会が、今年約九百名の参加者がテーブルを囲んで、一室内に着席、

## 東京青山同窓会総会

### 十一月十四日月開催

新潟本部より宮地校長、上杉副幹事長らに参加されて、大手町サンケイホールで、昭和六十三年度の総会が開催された。総会議事終了後の懇親会では最長老佐藤岩男(33回)の乾杯、佐藤隆(52回)農水相の挨拶、職業別大集合による名刺交換会等、約一六〇名に参加して、大盛況裡に終了した。

尚東京青山同窓会では、六十二年の行事として、在京同窓諸先輩による第一回文化祭を四月四日開催、絵画・鏤金・陶器・写真等出展、斉藤英四(幹事長 豊岡富栄 52回) 事務局長 佐藤良策(53回)

郎(36回)経団連会長の講演会も同時に行った。二回目講演会は十月二十四日、山城彬成(47回)NKK社長により、同じく東洋経済ホールに開催し夫々90人聴講した。



★人間は足元がぐらつくのを本能的に嫌うようである。新潟地震の折、生徒の避難を呼びかけながら、足元の床が大きくうねる木造校舎の廊下を駆け抜けた時のあの不安な気持ちを今でもはっきりと覚えている。「地震・雷・火事・〇」と昔の人が第一におそれたのも故なしとはしない。

★足元がぐらつくだけでなく天からレンガやコンクリートのガレキが降ってきて、あつという間に五万五千余の人命を奪つた昨年末のアルメニア大地震。あの惨状を伝えるテレビや写真にみた生存者のおびえきつたあの顔、顔。人間の不安の表情を、あれほど凄烈に示す顔を久しく見なかつたような気がするのである。一日も早い復旧と被災者の

## 足元をたしかめたい

想随頭  
校内幹事  
60回 上杉雅之

口ずさむ「もう幾つねるとお正月・・・」に通ずるものがある。しかし、どうだろう。いよいよ出発と決まつた日の二、三日前になると、何やら不安になり、そわそわして来るから妙である。ありきたりやっぱいいいな」である。

★「足元の安定」を強く望む人間の本性が人生で占める都合がいかに高くとも、足元を不安定にする「落し穴」はいろんな段階で待ち受けているのである。人間のあくなき挑戦を一瞬にして退ける天災、反省と後悔を重ねながらも繰り返される人災。今年はそのようなもの起らない安定した年であつて欲しいと願うのである。

★やがて新旧交代劇が行われる職場、合否に泣き笑いする高校・大学入試等で、しっかりとした足場を失つた者は安定を求め、また良い足場に恵まれた者は更なる向上を目指して、またと来ないこの一年の人生模様を描いていきたいものである。

# 佐藤農水大臣

## 母校で講演、植樹

小雪舞い散る昨年十二月十日で「母校あつての私であり、七日に、佐藤隆農林水産大臣 後輩達のために直接何かをし

(本校52回卒)の講演会が母校 たい」とと大臣がお話しにな 体育館で、期末考査を終えた つたのが発端となり、筑波龍 ばかりの後輩を前にして行わ 二氏(本校52回卒)並びに宮地 れました。終始、母校を、後 学校長のご尽力により実現の 輩を思う情熱溢れる大臣の講 運びになつたものです。

演に生徒達は魅了され、期せ 学校長の、佐藤氏が青山健 ずして二学期の締めくくりに 児として初めての大員であり 豊かな色を添えることとなり また氏の党・政府における輝 やかしい経歴などに触れた講

ました。 この講演会は、昨秋東京で 帥紹介のあと演壇に立たれ、 開かれた東京青山同窓会総会 紺のスーツに身を包んだ大臣



は相変わらず若々しく、ガツ ツに満ち説得力ある話し振りに、聴衆は約四分の講演時 間もあつという間に過ぎてしまつた感を抱かれました。 特に昨年八月に解決をみた 牛肉・オレンジ日米交渉の件 を採り上げ、「主権国家とし ての日本の利害を考えなければならぬ」と同時に「日本 は国際社会で孤立化してはならない」という二律背反の性格を孕む前提の中で、日本代表としてぎりぎりの線での交渉打開を図つた奮闘の日々を 披歴され、聴く者の胸を打ちました。

情あらはこそ」の信念から、千島夫が歌うあの「北国の春」で名高い、「友情」のシンボルでもある辛夷(こぶし)の樹を母校に贈呈されました。今春にも花をつけるだろうと思わ

### 本年度総会を終り

### 二年間を振り返って

実行委員長 64回 小田嶋 寿一

昭和63年度同窓会総会のは我々64期の卒業30周年を 場所を新装なつたホテル新潟 で開催しましたところ、会場 が広くなり全員が一室に合す ることができることもあり、 八三〇名と最高の出席を頂き ましたことを先ず御礼申し上 げます。



64回 小田嶋・風間の両氏

私は今大会をもちまして三 年間の実行委員長の任を解か れることになりホッと一息つ いておりませんが、振り返りま すと内心忸怩たる思いだけで す。幹事会の先輩後輩諸兄の や学校との連絡役などをする 筈だったので、諸々の事 情により彼等が動くことがで きず、止むなく風間士郎君と 語りあって有志を募り勝手に30 周年実行委員会を組織し、ゆ きがかり上母校との接触など しているうちに、64期で同窓 会総会の実行委員長をやれと 小林亨前実行委員長の仰せ



となり(この会合には私は欠 席でした)、これを受けて来 た風間君が当然委員長になる のかと思つてましたところ、 彼は偶々公職上多忙な任につ くこととなり私にお鉢が回つ て来たという次第です。 何とか逃げようともがきま したが上村光司先輩、小林亨 先輩などに押さえこまれ、止 むなく任務遂行の覚悟を決め ました。 何をどうすれば良いか全く 分らなかつた私を上村、小林 両先輩を始めとする幹事会の 各期先輩後輩諸兄の強力なご 支援により、また総会当日ま での準備と当日の運営につい ても母校におられる同窓の先 生達、同窓会事務局がすべて やつてくれ私は只その通り動 くだけで楽にやらせて頂きま した。同期の仲間も毎回多数 出席してくれて側面から助け てくれ感謝しております。



# 昭和天皇の母校訪問

昭和64年1月7日早朝6時33分、昭和天皇裕仁陛下が、四ヶ月余りの闘病生活の末に吹上御所で崩御されました。謹んで哀悼の意を表します。

翌1月8日、元号が平成と変わり、六十余年の昭和の時代に幕を降ろすこととなりま

した。

特に国体、植樹祭に心を寄せられたといわれる陛下は、母校を訪問されたことがあり

ました。

昭和39年、オリンピック東京大会への前奏曲、迎えて第19回国民体育大会春季大会は

## 畏友永井行蔵君を悼む

33回 山田 文一

新潟大学名誉教授・正四位勲三等旭日中綬章・故永井行蔵君も闘病生活約八ヶ月、遂に再び起つことなく、昨年八



十二月呱呱の声をあげたが、兄二人、姉二人の五人兄妹の末子として、長兄の広氏とはかなりの年齢差もあって、広氏が新潟師範学校教諭兼附属小学校主事の頃、郷里の小学校を卒業して梶立新潟中学校に入學した。そして、優秀な

成績で官立新潟高等学校に進み、更に東大国文科を卒えた昭和八年四月、若々しい文学士は希望にもえて教授の推せんする満洲の鞍山中学校に教師として赴任した。

居ること二年、昭和十年四月、新婚早々の夫人を伴って新潟高等学校教授として着任し、学校町三番町天神小路の新居に移って来た。それから勤続二十九年、この間に新制新潟大学の開学、学園紛争の嵐など幾多の困難に遭遇しながら着々と行政的の手腕も發揮して四十九年退官、更に請われて日本歯科大学新潟歯学部に移り、五十九年に退官するまで若い学生の指導に当り倦むところがなかった。

彼の柔和な温顔と悠々迫らざる態度。そして何よりも生徒を愛する気持が多感な学生に深い感銘を与え、その周辺には常に春風胎動の気分が溢れ、門下から多数の優れた国語・国文の指導者が輩出したのである。

私と永井君との交際が本格的に深まったのは、彼の天神小路時代からで、当時の私は市内の小学校に勤めていたが平素の親しい若い教員の間で、国語教育に熱心な者が多く、適当な指導者を得て古典文学を聴く会を持ちたいというこ

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

## 弟の命日に想う

23回 清水 浩一

★海浜の江田島へ、もう年齢超過で希望に燃えていたことが夢と化した兄克平のしよげに姿に、四弟逸郎が「よいいおれが挑戦」みごと合格を口癖だったことからも...

★昭和19年6月大作戦展開の機密をはらんで彼の所屬艦隊は密かに南下行動に在った。豈計らんや敵の情報網はすぐにこのすべてをキャッチしていたのである。9日正午比島ピワク島沖で敵潜水艦群の包囲に陥ち、八方より魚雷の集

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

とから、永井教授に交渉してほしいとの事で私がその役目を引受けたのであった。

私は当時天神小路に近い白山浦に住んでいたの、ある日久々に訪ねて行って久闊を叙し、若い小学校教師の研修に力を貸してほしいとお願ひした。高等学校教授として多忙の身であつたらうに私の願ひを快よく引受けてくれた上、国文談話会」という会の名称も決めてくれたのである。早速会員を募り会場も新潟

はじまり 昨年9月に入つて、大黒善弥(50回)先輩から電話をいただいた。「変なところへ行くそうラナ。あぶねエとこだつてエ氣イッけれ。オオカミやバゾクも居るし、江口良助(61回)たちも心配してたし。大黒さんは私の「ハイテーン水泳」時代の監督だつた。私の行動の節目は、こうしてさりげなく激励してくださるのである。

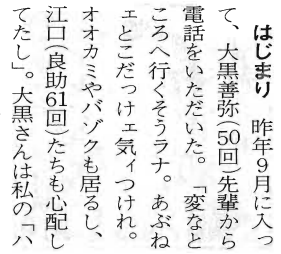
新潟県山岳協会大興安嶺日中友好合同踏査事前調査先遣隊長、これが私の任務である。外国人には未開放地区ということであつたが、数人の調査隊ならOKというみやげ話を「県民友好の翼」で金子副知事がもつて帰られたのだ。

隊長をひきさうける条件として私は、時期と隊員の一任を申し出たところ、金はどうせおまえら持ちだからそれでよい、とあつさりした回答をもつてしまつた。

あかい太陽 大興安嶺は、中国黒竜江省と内蒙自治区を南北に千キロほど連る大森林丘陵地帯で、一九四二年今西錦司博士の探検記録が手もとにあるだけである。

私は、時期を9月とし、中国最北端アムール河右岸の漠河村から大興安嶺に入り、あわよくば内蒙の満歸村にぬけ

てみよう、と決めた。両村とも鉄道の終点であるが、その間およそ二百キロの道路事情は行つてみないとわからない。四名の仲間を選んだ。訪中



歴五回、北京ーモンゴル独り旅、氷点下30度の雪原野宿の経験、等々多様なメンバーが、私の夢をふくらませてくれた。

北京から北上して漠河村までの二百六十キロは列車の旅であつた。沿線には、かつて戦の時に使つたトラック位の大きさのトーチカが置き捨てられてある。半日走り通しても景色は変わらない。幾度か大荒野の向うから太陽が昇つてきて、それが大きく真赤になつて沈んでいった。

四日目の昼すぎ、終点の漠河村に着いた。一昨年の大山火事の跡が見える。私たちを案内してくれる旅遊局の人たちが、ジープ三台で迎えにきていた。乗つてすぐ私が、アムール河までゆきたいと申し出ると、案内の人たちは困つた顔をされた。そこは、更に北へ90キロ、北緯53度、中国

よろしい。昼飯を食べたらすぐ玄関へ来い。砂利道をとぼして一時間半、

探すと、首の痛くなるような位置にそれは光つていて、祖国からのほのかなへだたりを私は感じた。

その夜、私はこっそり宿泊所の広場に出てみた。4℃。満天の星のなから北極星を探すと、

やきり立つた崖が見える。ソ連側へは絶対にカメラや双眼鏡は向けてはならない、といふ渡された。流れは意外に速く水はやや黒ずんでた。現地の人が洗濯をし、のどかに釣糸をたらしている。しかし所々に監視塔が見え、そこは緊張した国境であつた。

### 特別寄稿 中国大興安嶺の旅 一九八八・九・十四〜二十四 60回 平田大六(関川村)



アムール河右岸漠河村で

私たちはアムール河の岸辺に立つことができた。川中五百メートル。対岸はソ連領でや

李世臣さん以下四名が銃を持って案内してくれることになつた。川をこいだり、ノコギリで伐開したりしてジープをすすめる。車を乗り捨てると、こんどは六頭のトナカイが待っていた。そこへ全員

私たちは、永久凍土層の上でできた湿地帯を踏み、樹海の中を進んだ。ほとんど平坦なので、水準器、高度計、距離計などを使ってようやく玉地山(一〇五四)を探りあてた。ここを頂上にしませうか。

好(よろしい)。で合意を得た。日中友好万歳。黄色の林の間を通して日が昇ってくる。それは、東方、日本からの光であつた。

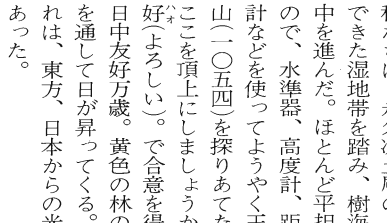
私たちは、永

トナカイに荷を積み大興安嶺の樹海をゆく

ひきかえした山麓からは、内蒙の満歸まで車道はのびていて、私たちは、かつて今西博士が歩いた探検路を列車で



満歸から金河をくぐる列車 後ろは大興安嶺(内蒙)→金河をのぼる



三十五期生は、本年が卒業六十周年に相当するので、去る六月十一日に新潟で記念会が開催されました。

徳亭」で、恒例の午餐会を兼ねて記念会を開催、懐旧談に花を咲かせた後、徳川光圀公の名園を逍遙し、玄人はだしの山名君により記念写真を撮影後、夫々帰途につきました。当会も昭和五十八年九月に発足し、今回は六回目の集合



在京新中二五回 記念会

で、互いに親睦の情も深まり好天に恵まれ、楽しい午後の一時刻を過ごし、会員の一部からは春、秋、二回の開催の要望もありました。(尾崎)

**会費納入のおねがい**

親しいお返事を致し、お便りをお送りください。連絡を密に2回以内にお知らせください。年会費1口1,000円、2口以上でお願い致します。

振替口座 新潟5-4455 青山同窓会宛  
銀行口座 第四銀行学校町支店  
口座番号 普通預金0275210 青山同窓会宛

「欠席者」小林商司、岡四四亥、熊倉雄三



# 聞き、見て、感じた

## 訪印の旅

38回 渡辺 義平

待ちわびし仏跡の旅冬うらら

旧臘、念願の訪印旅行に参加しました。成田から12時間(途中バンコックで待機1時間、時差3時間)で、デリー到着。温度が1℃〜3℃の冬の成田から32℃前後の印度の気温に対応して途中のバンコック空港で夏着に替えた。雪を出て印度の旅々着替えけり

一、釈迦の最初の説法地サルナート  
ニユーデリー(印度の首都ニユーデリーは新しい町、旧都はオールドデリー)から1時間の飛行でサルナート着、迎仏の塔(30米の丘の上に建つ煉瓦様の石の塔)を拝し、考古学博物館を見学後、釈迦説法の遺跡(此の地産出の煉瓦様の石で築いた側壁と床石のみが冬陽の中、静かに残っている小さな寺跡)を拝し、釈迦が二五〇年前ブツダガヤで菩提樹の下、悟りを開いた後、初めて五人の僧に説法する姿を偲び、一行15人は懇ろな合掌にひたった。

この遺跡は、その後多くの建物が建てられたらしく、約

一万坪位の広場です。この一角に日本寺(私等がこの旅で訪れた唯一の仏教寺)で吊された梵鐘(訪印の日本人一行の寄進の由)に感無量であつた。

二、印度教の建物「お寺」  
拜む像は無く(私の訪れた範囲では)建物群の西方に位置する拝殿に向つて祈る人々(神は西方にお在しますと信じている)を見て感じた事は釈迦が生まれた仏教発祥の印度は仏教の国でなく、印度教回教の世界であり、むしろピルマ、タイ、中国、遠くは日本で仏教が盛んである現況は私は解らなかつた(お解りの方はご教示を願う次第です)。

三、ガンジス河の沐浴  
印度教の聖地ベナレスのホテルを貸切バスで午前5時出発、聖なるガンジス河岸で乗船(日本の渡船程度のもの)漕行10分、日の出の朝霧の中に沐浴(近くからの撮影禁止)が始まっていた。女性は着衣のまま、男性は下帯のようなものを締め、河岸数百米の間に夥しい人々が旭日を浴びつ

つ濁る河に体を清めて?いる姿を見る。日中は32℃とはいえ朝晩は肌寒の沐浴に、信仰(一生に少くとも一度は聖なるガンジス河に沐浴することが、神・印度教の1の許に行くと感心させられた)の力

四、ガンジス河岸の火葬  
沐浴地点を下ると河岸の一段高い石畳から火葬の煙(野火のように)が数カ所から立ち昇っていた。遠景のため、会葬の人々を確認出来なかつたが茶毘に付してガンジス河に流し、次から次へと火葬が続けられるとのこと。ガンジス河に沐浴し、骨はガンジス河に流されると、その人は神の許に行くと思われている人々に幸あれとお祈りしました。

五、聖なる牛  
デリー師走聖なる牛に道譲り下船して繁華街へと狭い石畳の路(一人づつしか通れない。両側がすぐ住居の間になっている)を私等は行列縦隊で上つて行くこととし飼いの牛が道一杯に下りて来るのに出会い、ビックリして、思わず建物に寄り添うように体を縮めることが屢々であった。(牛は神の使徒であり、食用肉は鶏肉との由)

六、帝王の威力を示す大理石の廟  
タージ・マハール(アグラ)にてムガル帝国アクバル帝が愛妃の死を悼んで建てた大理石の廟(世界一の称あり)が、日に輝く白亜の殿堂は14年の歳月と莫大な財力、多数の労働力、膨大な原石と運搬の結晶とのこと。そのほかに「レッド・フォート」と呼ばれる赤い砂岩の城壁に囲まれた大理石の宮殿・フマーン廟(フマーン帝と妃の墓)の赤砂岩に白大理石をはめ込んだ美しいペルシャ風建築物など支配者の威力偉力を示す象徴を眺め、日本の皇室のことを思い「日本に生れた有難さ」を沁々と感を深くしたのは私一人ではないと思う。

七、象に乗ってアンバー城  
ヤイフルにてを訪れる  
タイバンを冠り四人一場で象に乗り石畳の路を丘(二百米位か)に建つアンバー城を訪れた。登るにしたがひ立体的に美しいといわれている風景を楽しむどころか、象から落ちないようにと必死の努力と我慢の連続で冷汗?のみ。アンバー城は周囲の城壁(万里の長城を思わせるような丘の起伏に従って築かれている)の中に、何々宮など多くの宮殿があり、これら城壁、宮殿は何れも支配者の力を示すものと思われた。

八、ヒマラヤ遊覧飛行  
案内書の「白銀に輝く霊峰を一望する大迫力シーンの連続です。セーターなど防寒着を用意」の名文句に魅せられて、夜明け前の暗い「デリー空港」から、18人乗りのプロペラ機に搭乗、1時間後機上(四千米位)からヒマラヤ山脈より昇る朝日を拝み、また明けた空運か白銀の連山を望んで国境(インドとネパール)飛行1時間で引き返した。

エベレスト山を眺めたいとの願望は達せられなかったのでガツカリしましたが、考えてみればヒマラヤ山脈は東京から沖縄まで(二千キロ)続く山脈とのことで諦めました。

九、インドが人口世界一  
これは昨年(昭和63年)4月3日、米商務省人口統計局発表「インドの人口は二〇五〇年以内に中国の人口を追い抜き世界一の人口国となる」との予測である。(4月5日新潟日報記事による)

私の訪印時は八億人余とのことで本年より六十年以内に十六億人となることになる。まさに人口爆発の悩みを抱えるインドでは、故インディラ・ガンジー首相(この方の茶毘の箇所は緑の広い広場にある)冥福を祈る行列が続いてきた(私を含めて)が強制的

な家族計画を推進し、八百万人の強制断種さえ断行したが大反対の暴動で、一年で撤回せざるを得なかつたとのこと。

訪印の各所で「人口の多過ぎる」?色々の状況が見られ大いに考えさせられた。

### 予告 67期・30周年会 六月十日(土)開催予定

67期(昭和34年卒)は、今年、卒業30周年を迎えるので記念同期会を、来る六月十日を期して作成の名簿も、日を④湯田上温泉 若竹旅館を経営して訂正々々であったが会場に一泊で行うことを新潟市内の幹事会で決定した。詳しくは今後、幹事で相談の上案内されるが、日程だけは承知の上、誘い合つて多数参加される様にとの幹事会の希望である。67期は昨年と今年が丁度四回目のエト(当り年)であり、年齢的にも四十八

76期幹事新潟) 石田瑞穂 ☎〇二五二八三二二五二 FAX 二八三三三八〇四

## 九四期卒 初会合

青山94期昭和61年卒は一月四日(土)、卒業以来初めての同期会を三越7Fの食堂を会場に開催した。

ストリートで大学へ行った者が三年生であるこの期は、丁度正月でもあり、実家へ帰省中の者にも好都合だったのか、有志幹事の呼びかけに参加する者百八十名余、母校からは、児玉、沢田、宮田、立川、栃倉、山崎、赤井田、野

坂、石井、金井の諸先生方、そして一昨年の春中条高の教頭に転出された入田先生もかけつけて下さり、午後六時半から約二時間余り、全体では、ビンゴゲームに興じたり、卒業以来のそれぞれの近況、大学の話など、組主任を囲んで懐かしい話を花を咲かせた。

玲瓏の天おふぐ時  
胸颯爽の意気に充ち  
廓寥の地をのぞむ時  
雄図にあつき血ぞ躍る  
讃へざらめや青春の  
光不滅のわが生命  
●心意気を謳う  
こうべに霜を頂いた今も、  
目を輝かし、声を張りあげて  
この歌をうたうのはなぜか。  
愛する母校の歌、教えきれぬ  
思いのつる歌。  
それだけではない。  
私達自身をうたった歌、将に  
光不滅のわが生命を讃えた歌  
として忘れ得ぬからだ。  
「玲瓏の天」で始まる一番の  
歌詞のすばらしさ、比類なき  
格調の高さ。  
そこには校名もなければ、山  
川もない。大地にすつくと立  
ち、難関にたち向う若人の心  
意気が詠いあげられている。

●御風の作詞  
作詞は「都の西北」を作  
った相馬御風だ。  
若くして颯爽と文壇に登場し  
た御風。思想の行き詰りから  
か、自然の中に身をとおこうと  
郷里糸魚川へ退任したのが大  
正5年。「玲瓏の天」制定が  
創立30周年(大正11年)だか  
ら、糸魚川での作詞である。  
御風の人生観が息づいている  
といわれる歌、  
「大ぞらを静かにしるき雲は  
ゆく しづかにわれも生くべ  
くありけり」  
と詠んだ頃であろうか。  
●「見さぐる越の…」  
二番以下は所謂校歌調、御  
風流の名文が大和田愛羅作曲  
の力強い調子に乗り親しみ易  
く、多くの同窓生は三番まで  
は詞を見ずに歌えると思う。  
●「五番を歌え」と  
今年の同窓会ではいささか  
戸惑った。司会者が「玲瓏の  
天」一番と五番を歌って下さ  
いという、あわてて歌詞を手  
に取った。四番・五番は良く  
覚えていない、在学中もあま  
り歌った記憶がないから。

### 高らかに歌おう 「玲瓏の天」を!

49回卒弘 中博 元

●校歌が検閲  
ところが、この四番・五番  
が災難にあっている。  
青山90年々表によると、昭和  
15年4月校歌文部省より改訂  
の上認可とある。  
昭和15年なら私も在学中、翌  
16年12月には日米開戦となる  
わけだが、そんな話は聞いて  
いない。多くの同期生に聞いて  
みたが誰も知らぬという。  
「青春の森」190周年記念に  
毎日新聞より出版1によれば  
文部省が全国の校歌を検閲し  
た際、四番の「裏日本の覇者  
として」を「裏日本の覇者  
として」に、五番の「白砂塵な  
ぎ丘の上」を「真白き砂の丘  
の上」と直された。  
何か拍子抜けの感じ。当時文  
部省に睨まれたら、「天津日  
嗣の御稜威に民草悉く恐懼感  
激せる神国日本を、廓寥の地  
とは何事ぞ」とか、「現人神  
のもと八紘一字の大義をなさ  
んとするに、時流が濁るとは  
けしからん」かと案じたが。  
●繰返さぬよう

歌を、との思いにかられる。  
●「玲瓏」と「百里」  
考えてみれば、「百里」の  
制定は創立60周年、百周年が  
間近いいま、「百里」で育つ  
た同窓生が、「玲瓏」を歌つ  
た卒業生より多いわけだ。  
学校では、入学時「玲瓏の天」  
を旧制中学校々歌として教え  
るが、その後歌う機会はない  
という。歌詞は応援歌々集に  
入っているとのこと。  
「百里流れて」は睿智あふれ  
る校歌だ。しかし「玲瓏の天」  
もすばらしい。校歌は幾つあ  
っても良いではないか。  
願わくば、「玲瓏の天」を第  
二校歌とし、末永く声高らか  
に歌われんことを。  
青陵健児の心意気として、幾  
久しく伝えられんことを。



## 小豆島のオリブの木の碑

六十六回生が、昭和三十二  
年春修学旅行で小豆島を訪れ  
た時、学年主任の沢山殿先生  
が、五〇センチほどの高さの  
小さなオリブの苗を手に入  
れた。小豆島観光協会か  
ら、新潟県の高校で同島を修  
学旅行で訪れたのは、新潟高  
校が初めてだということで贈  
られたのであった。それを持  
ち帰り、新築まもない現校舎  
正面玄関脇に植えられたので  
ある。風や雪に耐えて三十年  
今や五メートルを超える大木  
になった。そして秋にはつぼ  
らな実をたくさんつける。  
昨年夏卒業三十年を祝う同  
期会を開いた際に、沢山先生  
の発案で、この木に記念の碑  
を添えることになった。  
そして、たまたま昭和最後  
の日となった六十四年一月七  
日に、南国の木にふさわしい  
赤御影石の碑が建った。  
やがて創立百周年、そして  
二十一世紀に向けて、このオ  
リーブの樹が、たくましくそ  
の常緑の葉の枝をひろげ続け  
てほしいと願っている。  
(横瀬記)



### 青山同窓会収支決算書・収支予算書

収入の部 (自昭62年4月1日 昭63年3月31日) (自昭63年4月1日 昭64年3月31日)

科 目	62年度決算額(円)	63年度予算額(円)
繰越金	402,338	390,000
入会金	1,190,200	1,196,000
会費	3,686,000	3,400,000
雑収入	28,078	10,000
合 計	5,306,616	4,996,000

支出の部

科 目	62年度決算額(円)	63年度予算額(円)
人件費	2,713,630	2,720,000
通信費	595,170	600,000
印刷費	47,000	100,000
慶弔費	208,930	70,000
会報印刷費	380,000	380,000
会議費	259,894	300,000
卒業生記念品代	161,000	170,000
青陵祭補助	80,000	80,000
通信制補助	226,000	230,000
退職積立金	50,000	50,000
諸費	7,150	26,000
予備費	182,000	270,000
合 計	4,910,774	4,996,000

収支差引残高 395,842円 (次年度繰越)  
昭和63年 4月19日

上記の通り相違ないことを確認致します。  
監事 福山 健 ㊟  
監事 早 福 卓 ㊟

# 教師群像 (その1)

41回 大井 顯

一つ出たホイのヨサホイのホイ、人に知られた新中のホイ、くずまん先生の禿げ頭ホイのホイ。二つ出たホイのヨサホイのホイ、ふた目見られぬ河馬の面ホイ、逆に呼ばって馬鹿となるホイのホイ

紅顔可憐の12才の少年が口をとがらして新中数え歌の稽古に懸命である。

此の春、無事、県立新潟中学校に入学し、父のすすめで英語の補習に、同中学4年生の許に通い始めたばかりの頃である。そして新調の洋服の金ボタンと両袖の赤線が晴れがましい時でもあった。

此の4年生の大先輩の家庭教師の先達は、英語の勉強などい加減にして、専ら、学校の先生の渾名を此の小輩に説明するの力を入れている。「いいか」「くずまんというのはな、倉田という体操の先生で、いや、助手のような生かな。頭がつるつるに禿げていて、毛は一本もない、葛饅頭と同じだ。しかも頭の形も葛饅頭そっくりだ。それで奴はいつも体操帽をかぶってか

体操の教官で同時に剣道の教師であった高橋先生は、後頭部に一銭銅貨大の禿があることから「一つせんバゲ」略して「いつせん」と渾名されていた。五尺二寸そこその小柄な男であったが、剣道の腕前は抜群で、教士(五段以上)の段位を持ち、その実力は県下のトップクラスと言われていたし、また、鉄棒(機械体操)では大車輪が出来るというところで生徒達はその演技を畏敬の念で見ていた。

柔道の先生で古館という人は「象」と呼ばれていた。一見して「ぞう」がピッタリするタイプで、いつも腹で歩いている感じと、目が柔和で怒ったことがないような顔で、いつもパイプか煙草を銜えていた。当時は剣道と柔道とは選択の正課であったから、すべての生徒は「いつせん」か「ぞう」には扱われた記憶が残っている筈である。

地歴の先生で「ガニ」と渾名され、生徒達に受けのよかつた人、姓は鈴木、名は要、顔は正に平家蟹、甲羅に目鼻をつけた感じで、平家がにを略しての「ガニ」であり、横這いをするカニではない、やはり「ガニ」である。「ガニ」氏は中学教師を退職後は、某相互銀行の重役にまで出世されたと伝えられている。

もう一人、大内という国漢と修身の先生で渾名は「ばんつま」、当時売り出しの若手俳優の板東妻三郎に横顔が少しいたことと、授業中彼が

## 東京・新潟青山三八会 信濃川を屋形船で遊覧

青山三八会の東京会員との合同総会が八月十四日、田中ホテルで開催。当日は午後一時同ホテルで昼食後、マイクロパスで万代島まで、ここで貸切りの屋形船「ばんだい丸」に乗船。

出発に先立ち桶谷幹事より、同氏の研究資料「往時の想出の資料 信濃川今昔物語」により河口附近の移り変わりについて説明を聞く。

約一時間半にわたり、信濃川河口附近から上流関屋分水まで遊覧。旧万代橋の思い出の報時塔、乗入台船の発着所、往時の佛を全く残さない白山神社裏手、新中ボート部艇庫附近など六十余年の懐旧談に花を咲かせ思い出は尽きない。

総会は後五時過ぎ、田中ホテルの富貴の間で開会。当番幹事の開宴の挨拶でお互歳をとつても物忘れを気にするな物忘れを気にしないことが老

喋ると唾が教室中に飛び散ることから、「ばんつば」を含めて「ばんつま」なんだとは4年生の先輩の説明であった。(次号につづく)

(新潟市医師会報より転載)

報告、吉田東京幹事の音頭で(出席者) 乾杯、涼風に河面にうつる万代橋の夜景を満喫しつつ興に乗じ談論風発、お互いに年齢を忘れ痛飲、益々盛り上がり、最後に近藤圓君の音頭で懐かしいの新中応援歌を始め次々と大合唱、延々三時間余に及び次回の再会を約して後九時過ぎ散会。(宮路四郎 記)

十一月十二日秋晴れの万代橋ほとり新装なったホテル新潟において五九期の同期会が開催された。

今年天皇陛下のご病状が影響して東京方面からの参加が少く六〇名という小勢ではあったが、恩師の井上、田辺、関口、藤田先生のお言葉を頂る。(幹事 市川鐵夫)

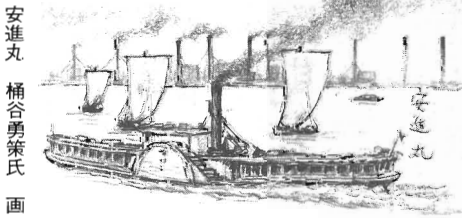
## 第五九期 同期会開催

「仲間と多くつきあうこと」「頼まれごとで嫌な顔をしないこと」「物事に熱中できること」「体と心と頭を適当に使うこと」など、特に第一条の「身嗜みよく異性に興味を持つこと」では満場爆笑の一幕もあった。

続いて渡辺常任幹事の会計

昨年、8月30日、この年、丁度前厄にあたる75期生の有志は、呼びかけて拠金、同期生の厄払いを白山神社に祈願するとともに、母校に校旗を寄贈致しました。有志代表が持参し、宮地校長に手渡ししました。

## 75期生 母校へ校旗を



安進丸 桶谷勇策氏 画



75期生 母校へ校旗を

# 三九会は東京で

## 39回 福山 健

「新潟と東京は汽車も便利になつたのだし、今年の例会は東京でやってみるか」と地元幹事に計り、三月に入ると早速。三月二十日に同期諸兄に々々に日取りを決め、在京の村健君に会場の選定を依頼した。同君から折り返し通知がな。



新緑もすぎ、天候まことに不順な夏もすぎ、たちまち秋十月、当日は天気晴朗、東京の空は青く晴れ渡り、素晴らしいケヤキ並木の影さすところ原宿駅前通り、陸橋の上から巨大な武道館の大屋根が眺められる。街は若者たちで一杯だ。やがて定刻、続々と常連新顔と旧友が揃った。卒業以来五十六年、少年時代の面影はどこに残っているがすぐには思い出せない。

あんなに清純・健康だった我々を激動の昭和がこんな老の姿に変えたのだ。不自由な膝で、奥さんに附添われて出席する友二人。

三九会々長役の上原虎雄君の開会挨拶に次いで相変らず精気ハツツとした阿部助哉君(前社会党代議士)の乾杯で宴に入る。

約六十年の歳月はたちまち消え去り、忘れ得ぬ新時代の昔話や死去した旧友のこと等話題はつきない。パチパチとあちこちでスナップ。自己紹介に次いで皆川竹次郎君の音頭で旧校歌を合唱、髪も黒々としてまだ青年の面ざしの猪初男君(前新潟大学長)の万才三唱に和して会を閉じた。

「当日の出席者」小林清市郎、杉崎晋、石高信司、高橋新一、上原誠一郎、渡辺俊男、出塚浩一、古沢(石山)長衛、関根進、中村健、森上輝雄、阿部助哉、皆川登良夫、皆川竹次郎、上原虎雄、田中正一、鈴木秀夫、猪初男、五十嵐健治、斎藤喬、大野恵司、樋口雄七、福山健(以上23名)

# 42回恒例の同期会

## 42回 菊地 勲

どうも幹事が万年幹事では同期会もマンネリ化して、趣向も変わり映えがしない。だからといって代わってくれる者もないので、仕方なしに福田、中野、菊地の三人で幹事を永年引き受けている。今年も恒例により、11月12日、同期生篠田君の経営する旅館で開催された。集まった面々は東京より相沢康平、仙台より小泉俊平、宇都宮より初参加の塚野俊二、以下新潟地区の豊岡憲夫、羽田軍次、福田茂夫、菊地勲、大野総一郎、石本洪規、佐藤政治、岡嘉一、西山秀夫、長合川友也、薄田開元、篠田富衛、北村惣一郎、高山雄次郎、横山(旧姓新田見)四郎、渡辺健治、有田寛一(順序不同)の諸君20名で、地方産業界や、文化芸術、医学、医療等各界の発展のために寄与してきた錚々たる連中である。

今年は一人の訃報にも接していないのが何にも代え難い喜びであった。

高山君の巧みなハーモニカの伴奏で、玲瓏の天仰ぐとき……と声高らかに校歌を斉唱。再会を期して散会した。



★クラス会の記は、出席者の名前をカットしないで載せてくれとの要望が多数です。クラス会、クラブはできるだけたくさん載せたいので、写真を添えた短か目の開催報告もお寄せ下さい。

★今号は長文の原稿が多くて限られた紙面の割付に苦労。

★今後とも会員からの寄稿をお待ちしています。13字詰で80行位(約千字)のものが読み易い様です。

★同期生活躍のニュースなどは事務局へお知らせ下さい。原稿を依頼したり、インタビューに出向いたりして、皆様に広報したいと思えます。

★今後とも会報への卒直なご意見、ご要望をお聞かせ下さる様お願い致します。

# 73回田中正弘氏個展

県高を卒業後、東京教育大彫塑科を卒業した同氏は、一九七六年初個展、以来東京銀座を中心に個展17回、グループ展16回を開催。主に鉄を素材とした立体作品を創っていたが、今度新潟伊勢丹7階の美術画廊で初めて個展を開催。会期は1月26日㊦～30日㊦まで。同窓各位のおいでをぜひと、恩師の野呂先生からのお便りでした。

# 編集後記



# プレ五十年 46回生同期会

卒業して半世紀、よく生き  
てきたというのが集まった者  
の感慨であった。昭和十六年  
の現役兵として入隊した我々を  
待ちかねたように太平洋戦争  
が勃発、南へ北へ、空に海に  
陸に厳しい時代を過ぎた。  
戦後は世渡りの不器用さを  
笑われながら唯一筋に励んだ  
人生。入学時の二百五十名も  
今や半数に近い百三十七名。  
十年前の同期会では母校の屋  
上から変つてはいるが周囲を  
眺めたあと在学中に歩いて訪  
れた弥彦神社に向け夕焼けの  
蒲原平野をバスで走つた思い  
出がある。今回は東京方面か  
らの参加も考えて四回目の湯  
沢開催となり十月二十一日、  
ニューオータニを会場とする。

北海道から本間徹、郡山の  
松本芳昌、東京方面出田充、  
今井忠一、小熊幸男、佐野英  
一、富所強哉、中村芳彦、浜  
田敏衛、坂内昇、堀松吾、村  
山勝栄、山田市男、地元新潟  
安沢物平、江口松弘、大津任、  
熊谷大輔、栗原伊藤、道樹、  
小林(菅原)信夫、斎藤博、佐  
藤(高橋)正利、菅原一房、高  
井高男、鶴巻鉄三、永井達吉、



湊栄一と幹事の金子政太郎、  
横山隆二、高橋是成の二十九  
名であった。  
同期会がスムーズに開催出  
来るのは常に献身的な人がい  
てくれるからである。横山君  
を中心にかけて鶴巻君がその  
人であり、その後を金子君が  
引継いで万全を期してもちっ  
ている。東京では浜田、山田  
両君が幹事として活躍中、感  
謝しています。  
今回は社用で出席不能故身  
今回は社用で出席不能故身

代りにと(出席時には手土産)  
自社の酒「代々泉」を届けて  
くれる塚野敏雄君。有難く頂  
戴する。懇親会はあつという  
間に定刻を過ぎ、当然の如く  
凱旋歌「強者」校歌「玲瓏の  
天」を全館に響けとばかり唱  
い幾分気持も落着く。あらか  
じめ幹事の部屋は二十余畳と  
広く二次会に最適。教え子だ  
という芸妓さんも連続で賑や  
かなこと。  
驚いたのは酒も強いが体力  
もある。午前三時頃ようやく  
静かになりほつとする間もな  
く六時前から起き出す有様。  
これでなければ生きてこれな  
かったとも思う。再び六十年  
目指して各自の途を歩くこと  
を約して解散。  
(幹事高橋記)

## 青山渋柿会例会

38回 近藤 圓

新中寄宿舎同人の青山渋柿  
会は恒例により、十月第一日  
曜の二日正午から、田中ホテ  
ルで開催した。  
いつもこの会をリードして  
下さった会長の永井行蔵さん  
が、八月二十三日に亡くなら  
れたので、いつになく寂しい  
集まりになった。初めに黙と  
うをささげ、続いてかつてこ  
の会で永井さんが話されたテ  
ープを聞いた。  
「自分の忘れてしまっている  
ことを、友達が覚えていてく  
れるので、友達がなくなると  
悲しいのは、その友達の中に  
生きている自分が、友達と共  
になくなってしまふからだろ  
うと思います」というお話は  
今更のように、永井会長の死  
と共に、自分の寄宿舎時代の



思い出も消えていくように思  
われ、みんな何とも言えない  
寂しさにおそわれた。自然、  
話は寄宿舎の頃の思い出と  
なった。  
とかくしめつぽくなりがち  
の会も、ちょうど折りからス  
タートした、ソウルオリンピ  
ックの最後を飾るマラソンが



としては最新鋭機を寄贈した  
が、十二年経過し、老朽激し  
く、使用不能となったため、  
母校野球部の強化と「甲子園  
への夢」の実現の一助として  
贈ったものである。  
母校は平成四年に創立百周  
年を迎える。百年になんなん  
とする現在、部員は「甲子園  
出場」をめざし、毎日一生懸  
励した。

## 母校野球部に ピッチングマシンを寄贈

青山野球クラブ(野球部O  
B会)は、昨年八月、かねて  
より母校野球部から依頼のあ  
つたピッチングマシンを寄贈  
した。昭和五十二年にも当時  
命練習に励んでいる。学校も  
百年に一度しかないこの重要  
な時期を認識し、野球の指導  
体制にも理解を示して、専門  
の教員を招請するなど積極的  
に取組んでいる。部員は新監  
督のもとに、新しい練習方法  
を取入れるなど努力しており



曙光の見える状況である。  
このたび寄贈したピッチン  
グマシンは、ストライクグー  
ンの範囲内でランダムに球道  
が変化する新鋭機である。夢  
が夢でなくなり、平成四年と  
いわず、近々に念願が成就す  
るよう希望したい。  
九月十日に披露会が母校グ  
ランドで行われたが、清野準  
一会長はじめ会員が約四〇名  
ほど集まり、併せて後輩を激  
励した。

## 後輩の活躍

- 秋季地区大会上位入賞
- ①団体 水泳男子総合一位、卓球男女各一位、軟庭女子三位
- ②個人 水泳男子四〇〇米メドレー一位(杉山、岡田)、水泳吉村、一五〇〇米自由形一位、水泳一〇〇米平泳二位岡田、一〇〇米背泳二位杉山、四〇〇米リレー二位(吉村、藤沢、藤井、赤沢)、八〇〇米リレー二位、二〇〇米平泳三位岡田、二〇〇米背泳三位杉山、女子水泳四〇〇米リレー二位(中矢、名川、井嶋、佐藤)、テニス男子W二位(岩戸、三沢)、S三位(岩戸)、女子W二位(西脇、上村)、S一位(西脇)、卓球男子S二位(広野)、陸上男子四〇〇米三位(古俣)、八〇〇米一位(古俣)、一五〇〇米三位(伊藤)、五〇〇米三位(馬場)、一一〇米H一位(土田)、同二位(若山)、一六〇〇米リレー三位(大山、渡辺、木谷、古俣)、走巾跳一位(志田)、三段跳一位(吉津)、同二位(志田)、陸上女子八〇〇米三位(上村)、フェンシング男子フルール二位(保科)

- 県高校新人テニス大会
- 女子S一位(西脇)千花
- ジュニアオリンピック大会
- 男子走巾跳四位(志田)哲也

# 画人笠原軌と

## その父漁村 (四)

60回 小林 智 明

同窓会のみなもと(その二)  
ればならない。  
明治三十九年八月、白山公園借楽館に開催された新潟中学出身者同窓会第一回大会のそれ以前にも、東京ではすでに新潟中学同窓の親睦会がしばしば開かれていた。「遊方会雑誌」第二十一号に寄稿された「在京新潟中学出身者親睦会通信」によれば、その一番古い集りは「新潟中学出身者大高会」という集りで、明治三十五年の秋に、当時第一高等学校三年生であった保倉熊三郎(七回・旭町通)らが発起して「大高会」を本郷の駒込の追分町の「梅月」という菓子屋で開いたとある。その近くには、その頃「吾輩は猫である」を世上に流布させて有名な夏目漱石が、少し前まで住んでいたそうである。大高会という「忠臣蔵の大高源吾か沢庵漬でも想起するような名……」は、当時の帝国大学(現東大)の第一高等学校の高とから取った名で、一学期に一回づつ開いて明治三十九年まで続いていた。桜井天壇(五回・村松)、宮嶋二郎(五回・三条)、玉木二五三九(五回・南浜通)、保倉熊三郎、佐藤政太郎(八回・新潟)、中村隆治(八回・水原)、須藤新吉(八回・水原)、青木得三(九回・秋田)、山崎良平(九回・小池村)、湧井廉平(九回・国上村)などがその常連であった。会場は後に梅月から上野の東華亭へと移るようになり、そこでよく開催されるようになった。

その大高会が呼びかけて、在京の新潟中学出身者全体に及ぼすようなことになって、「在京新潟中学出身者親睦会」が明治三十九年十一月十日、上野の韻松亭で開かれた。音楽学校、高等商

業学校、外国語学校、高等工業学校、美術学校、商船学校、早稲田大学、慶応義塾、法学院大学、中央大学、日本大学、国学院等にいる新潟中学の同窓生に通知した結果、三十名が出席した。帝大、一高以外には音楽学校の大和田愛羅(十二回・村上、新潟中学校々歌、新潟高等学校々歌の作者)、高等商業学校の小山九一(十回・古町通五)、高等工業学校の堀越郎(十一回・村松)、盛山祿衛(十一回・新津)、早稲田大学の南秀三郎(十回・礎町通)他十名ほどが集った。更にこの会の第二回は、翌明治



笠原 軌

の同窓会第一回大会にも出席したが、その年の春には、三年後輩の鈴木良次と富田温一郎が、美術学校の入学試験を受けるために先輩の軌をたよって上京して来た。軌は二人のために谷中の植木屋の一室を借り、そこで三人で自炊生活を始め、二人の受験に備えてやった。美術学校西洋画科の試験には、石膏の模型を木炭で描く実技があったが、鈴木良次はそれを鉛筆画でやってのけて、案外らくらく合格して軌を驚かせたのであった。富田も合格し、二人は青山の先輩である軌に多大の感謝をした。

月を載す

白山堤外の舟

花に酌む

翠柳古園の楼

家郷重ねて到れば

君既に逝き

今復た誰とともに

昔游を話さん

屠龍山人

(旧白山浦より講事堂  
岩橋幸治氏蔵)

四十三年の三月三日、上野の東華亭で開かれ二十七名が出席した。そしてその通信者は「諸君、願わくは東京に新潟中学出身者親睦会というものが有って、毎学期一回、東京のどこかに会合して、遙かに百里の彼方である母校を偲んで居るということを記憶して頂きたい……」と記している。今日の東京青山同窓会のみなもとともいうべきであろう。

美術学校在学中の軌は、毎年夏休みには帰省し中学の旧友と友情をあたためた。また後輩の面倒もやいた。明治三十九年の夏休みの帰郷で、借楽館で

また或る夏休み、小学校の教師をしている同級の薄田長太郎(白天郎)と一緒に古町を歩き、新築まもない蕎麦屋の新屋の二階に上って共に酒を酌んだ。薄田は寄居の旧家である刀鍛冶の孫で、日頃から「俺の先祖は大坂落城の薄田軍人だ」などと言う飄逸な友で、剣道が強く、画才もあった。また俳句もよくしたことは前に記した。

一酔して興に乗った白天郎はその時、目の前の襖二間に大布袋図を描き飛ばした。もとより酔興の呵成であり、軌のように本格に学んだ画ではないのだ

が、その匠気のない筆は無限の妙味を現出して軌を驚かした。新屋の主人はこれを見て、困ったことをしてくれたと思ったが、日頃子弟が世話になっている学校の先生では、怒ることも弁償してもらおうこともならず、間もなく張り替えてしまったということである。

後年、軌はこの親友をしのび、「天もし白天に年を仮してその俳句に精進せしめ、もしくは画道に発奮せしめたならば、子の如きは遂に彼の後塵を拝したであろう。不幸にして夭折して終ったけれども、幾年の後にいかなる知己が待ち構えていないとは誰が保証しよう。その軽妙な俳画に千金を投ずるものなく、彼の襖の布袋図が他日万金に値しないとは誰が断定し得よう……」とその才を惜しみ、更に「……その死の床より遙かに予を激励した手紙は殊に哀切である。予未だその遺霊に報ゆる道を知らず、又荆鞭を負うて墓前に謝せんのみである」と新潟新聞に記している。その激励の手紙については後述するが、大正の初め、当時失意の底に沈んでいた軌を病床より励まし、発奮をうながした友情の手紙である。

さてその頃の軌の父漁村は、毎年夏休みや、春休みに帰省してくる軌を、学校町の家で楽しみに待っていた。相変らず母校新潟中学校で漢文を教え、また舎監として生徒に敬愛されていた。その頃の学校の様子と生徒らを詠んだ漁村の詩に次のようなのである。

松邱杉塙別成郷  
松邱杉塙 別に郷を成し  
險翠奇青講事堂  
險翠 奇青 講事を護る

一樹梅花微点白  
一樹の梅花 微かに白を点じ  
数株柳色暗含黃  
数株の柳色 暗に黄を含む

雪消宿麦出抽地  
雪消え 宿麦出して地に抽し  
日暖游魚争上梁  
日暖く 游魚争うて梁に上る

放学諸生何処出  
放学の諸生 何れの処にか出で  
春風吹度打球場  
春風吹き度る 打球場

(つづく)



青山同窓會會報

Table of names and titles, organized in vertical columns reading from right to left. Includes names like 夫正學, 紀直子, 明恒, etc., and various titles such as 子, 次男, 孫, etc.